ペルヌ・レ・フォンテンヌにおける ZPPAUP の運用

フランスにおける建築的・都市的・景観的文化遺産保存区域
(ZPPAUP)に関する研究 その2

ON THE APPLICATION OF THE ZPPAUP IN PERNES-LES-FONTAINES

Studies on the french zone of protected architectural
and urban heritage (ZPPAUP) Part 2

和田 幸 信*

Yukinobu WADA

This paper deals with the application in Pernes-les-Fontaines of the Zone of Protected Architectural and Urban Heritage(ZPPAUP), which was enacted in 1983 in order to protect the historical landscape. By examining the transformation of the town from 11th century, problems concerning the urban heritage are indicated, and measures are taken in order to arrange the landscape. The area of the ZPPAUP is classified into two zones; namely, the urbanized zone and the landscape zone. In each zone, precise protection rules are introduced to control the urban landscape.

Keywords: France, ZPPAUP, heritage, landscape, application of system, zone

フランス、ZPPAUP、文化遺産、景観、制度の運用、地区

1. はじめに

フランスでは1983年に建築的・都市的・景観的文化遺産保存区域(ZPPAUP)¹⁾を制度化した。保全地区が非常に価値の高い歴史的環境を対象とするのに対し、ZPPAUPはより日常的な景観を対象とすると共に、手法もより簡易である。本報は前報²⁾に続き、ZPPAUPを対象として、制度の実際の運用を明らかにすることを目的としている。具体的にはZPPAUPが現地においてどのように作成されているか、作成において対象地の文化遺産がどのように分析され、保全の指針が提示されるかを説明することを目的としている。

事例地として、プロヴァンスと呼ばれる南フランスのヴォークリューズ県にあるペルヌ・レ・フォンテンヌ(以下ペルヌと呼ぶ)を選定した。ペルヌは、ヴォークリューズ県の県庁所在地のアヴィニョンの東28kmにある、人口約8000人の町である。この町はフランス革命以前はコンタ・ヴェサンと呼ばれるローマ法王の領域であり、教会や修道院、貴族の館など多くの歴史的建造物がある。このためペルヌは、1990年に登録景勝地³⁾として登録された。

ZPPAUPでは、地域圏(レジオン)により承認が行われる⁴⁾。したがってペルヌのあるヴォークリューズ県が含まれるローヌ・アルプ・コート・ダジュール地域圏のZPPAUPの作成状況について考察しておく。このレジオンには6つの県があり、アルプ・ド・オ・プロヴァンス県を除く5県でZPPAUPが用いられている。1995年9月の時点で、15のZPPAUPがレジオン知事により承認され、18の区域が作成中であ

る⁵⁾。一方、フランス全土では95県のうち45県でZPPAUPが用いられ、447のZPPAUPのうち134区域が最終的に承認されている⁶⁾。このような全国の動向と比べると、ローヌ・アルプ・コート・ダジュール地域圏ではZPPAUPを利用する県は多く、また承認の段階まで行ったZPPAUPも多いといえよう。

ペルヌでは1989年に市議会でZPPAUP⁷⁾の作成を決めた。1992年には土地占有計画(POS)が承認され、その後1995年にZPPAUPは最終的にレジオン知事により承認された。

ZPPAUPでは、保全地区とは異なり、景観を保全する規定を任意に定めることができる。したがって規定を緩く作るならPOSに近いものになり、詳細に作るなら保全地区に近いものになる⁸⁾。ペルヌのZPPAUPはこの地域圏で作られたZPPAUPの中で最も詳細に規定が作られたものの1つで、この点、保全地区に近い。

制度ではZPPAUPの文書として、概要報告書、規定文書、図面が作成されることになっている⁹⁾。一方、ペルヌのZPPAUPでは、5種類の文書が作成されている。すなわち、A. 定義、B. 概要報告書、C. 法規、D. 規定集、それと2種の図面である¹⁰⁾。Aの定義は、制度では述べられていない文書で、ZPPAUPの制度を説明すると共に、登録景勝地の範囲、POSのゾーニング、ZPPAUPのゾーニングを表している。Bの概要報告書は制度で述べられている通り、ペルヌの都市空間の変容と、これに基づく現在の都市空間の現状と課題を表している。制度で述べられた規定文書として、ペルヌではCの法規と

* 足利工業大学工学部建築学科 教授・工博

Prof., Dept. of Architecture, Ashikaga Institute of Technology, Dr. Eng.

図-2 13世紀の町

図-3 14世紀の町

図-4 15～16世紀の町

図-5 17～18世紀の町

図-6 19～20世紀の町

図-7 1816年～1990年の変化

遺産が評価され、これらを保全するためのゾーニングが検討される。(4)17～18世紀の町 (図-5)

(1)13世紀の町 (図-2)

13世紀の半ば、ベルヌの町はコンタ・ヴェネサンと呼ばれるローマ法王の領地であり、町は都市壁により囲まれていた。この都市壁は小規模なもので、現在ではほとんどその跡を残していない。ただ、丘の上のシャトーは一部が現在も残されており、単なる文化遺産を越えてベルヌのシンボルとなっている。

(2)14世紀の町 (図-3)

19世紀に取り壊された都市壁は、14世紀に作られたものと考えられている。都市壁は取り壊されたものの6か所の門は現在でも残されており重要な歴史的建造物になっている。現在でも、この取り壊された都市壁から内部に続く道は、そこから閉ざされた空間に入るといふ「門の効果」を作り出している。

(3)15～16世紀の町 (図-4)

この時期、東西を結ぶ道路として現在のラスパイユ通り、レリュブリック通りができ、その後の都市構造一すなわち道路網と、道路の両側に作られる区画の形態と区画に建てられる建物の発展に大きな影響を及ぼした。また、これらの道路に沿って、貴族の館が建てられ、現在でもその一部が残されている。

17世紀以降、都市壁の内部において道路が次々と作られるようになり、18世紀には道路網ができあがった。これと平行して建物の建設も進み、ほぼ現在の都市構造が形成されてくる。また都市壁の北側のノートルダム寺院の周辺でも、道路や建物が作られるようになった。この時期までに形成されてきた歴史的な都市構造を保全することが重視され、このためZPPAUPの区域内の地区の設定(ゾーニング)の際に第1にこの点への対応が考慮された。

(5)19～20世紀の町 (図-6)

19世紀以降における最も大きな都市形態の変化は、19世紀後半に行われた都市壁の取り壊しである。この都市壁の跡地に並木道が作られ、すぐれた緑地景観となっている。また、町の南部にカルバントラ運河が作られた。ZPPAUPでは、これらの緑地や水辺という「景観的」文化遺産を、歴史的な都市構造という「都市的」文化遺産と共に保全することが意図されている。

(6)1816年～1990年の変化 (図-7)

ナポレオンが土地区画台帳を編纂した1816年から現在まで2つの変化がみられる。1つは、19世紀における建物の取り壊しと、その跡地が泉の設置された小広場となったことである。この結果、ベル

● ベルヌの中心地	▲ 保存するアプローチ
① ルイ・ジロー広場	▲ 改良するアプローチ
② シャトーの丘	■ 整備すべき景観
③ 市役所	●●● 整備すべき道路

図-8 現在の都市空間

— 袋小路	○ 建物下の通り
— 中世の道	— 壁と門
— 広場と小広場	— 門の効果
■ 並木道	

図-9 都市的文化遺産

■ 優れた建物（貴族の館などと庭）
■ それ以外の優れた建物
● 記録すべき建物

図-10 質の高い建物

図-11 登録景勝地の位置

図-12 土地占有計画(POS)の区域

図-13 ZPPAUPの区域

ヌの名称ともなっている泉(フォンテンヌ)のある小広場が数多く生まれ、ベルヌ特有の景観を作り出している。もう1つの変化は、都市壁の跡にできた並木道から内部へ続く道ができたことである。

4. 都市空間と文化遺産の現状と対応

以上みてきたような都市空間の歴史の変容の分析に基づき、現在文化遺産が建築的、都市的観点から評価される。そして、これに対応した保全手法と、そのためのゾーニングが検討される。したがってZPPAUPは、あくまで歴史的建造物の保全から保全地区に至る文化遺産の保全手法の系譜に位置づけられる。

現在の都市空間については、町の歴史の変容に基づいて評価が行われ、これに基づき文化遺産やこれにふさわしい景観を整備するための方針が検討されることになる(図-8)。対象となる区域には、旧市街地と呼ばれる都市壁の内部だけではなく、旧市街地周辺と呼ばれる、すぐれた緑地、水辺の景観となっている都市壁の周囲の地域も含まれる。また、ここから旧市街地へのアプローチも検討される。この点、都市壁の内部が自動的に設定され評価された保全地区と大きく異なっている。

都市壁の内部については、中心地としてのイメージを高めることが検討されている。一方、周囲の空間については文化遺産に恵まれ

た旧市街地にアプローチするのにふさわしい景観とすることが提案されている。このため、宅地化¹⁸⁾の進んだ地域からのアプローチについては改善が求められることになる。

都市空間の分析により、旧市街地および旧市街地周辺について現状と課題が提案されることになる。旧市街地については、文化遺産が多いもののシャトーの丘により東西に分断されていることが、現状の問題点として指摘される(表-1)。その対応として中心地にあるシンボリックな建物や広場を結びつけ、中心地としてのイメージを高めることが提案されている。保全地区では個々の建物のみが保全の対象となるのに対し、ZPPAUPではこのように景観の点から文化遺産としての建物や広場などを結びつけることが考慮される。

旧市街地の周辺については、旧市街地以上に景観の点から現状が分析され対応が検討されている(表-2)。この点、ZPPAUPは保全地区とは異なり、都市壁の周囲まで対象とすると共に、この地域について個々の建物からでなく一定の視野の景観として扱っている。

旧市街地周辺として、町へのアプローチと水辺としてネスク川、カルバントラ運河の現状と対応が検討されている。町へのアプローチでは特に北部のマザン方面からのアプローチが評価されており、このためゾーニングにおいて保全が検討されることになる。一方、水辺ではネスク川とカルバントラ運河について景観として望ましく

表－１ 旧市街地の現状と課題

現 状	対 応
文化遺産は多いものの、中央にあるシャトーの丘により旧市街地は東西に分断されている。このため訪れた人は、一方しかみないことが多い。	東西の中央にあるシャトーの丘に結びついて、商工業の中心のルイ・ジロー広場がある。この広場と、学校、役場との結びつきを強める。

表－２ 旧市街地周辺の現状と課題

空間	現 状	対 応
町へのアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> －アヴィニオン方面からのアプローチには自然が残されている。 －マザン方面からのアプローチは運河と集落があり美しい。 －カルバントラ方面からのアプローチは都市化により景観が損なわれている。 	<ul style="list-style-type: none"> －アヴィニオンとマザンからのアプローチについては、道路の周辺の都市化を防ぐ。 －アヴィニオンからのアプローチについては、一定の地域を都市化の受け皿とする。
ネスク川・旧市街地の付近	<ul style="list-style-type: none"> －観光案内所とノートルダム橋の間、ネスク川は整備されている －クルド・ラ・ビ・ユリック橋の付近の土手は未整備である。 －ポルト・ヴィルヌーブ橋と観光案内所付近は、ベルヌの文化遺産と調和しない。 	<ul style="list-style-type: none"> －ネスク川全体について整備を継続して行う。 －以前の消防署の建物を移動して市の立つマルシェ広場を整備。 －観光案内所とその側の駐車場を整備して周囲の景観との調和をはかる。
ビュイの丘・カルバントラ運河	<ul style="list-style-type: none"> －ビュイの丘の南東と西の斜面で都市化が進む。この一帯は、中学校へのアプローチである。 －丘の麓から、カルバントラ運河が２ヶ所、見える。 	<ul style="list-style-type: none"> －残された自然と運河の岸を自然景観の点から整備する。 －中学校へ向かう丘へのアプローチを整備する。このアプローチと役場とを結びつける。

ない場所が指摘され、改善が求められる。

保全すべき都市的文化遺産も、都市空間の歴史の変容を通して検討される(図－９)。このような文化遺産は、泉のある広場、袋小路や中世の道、建物の下通路(soustat)、並木道、残された都市壁と門など多様である。保全地区と比べるなら、広場や道路など日常的な都市空間が文化遺産として重視されている。このように日常的な空間が対象とされているため、単に保全だけではなく、日常生活の中での利用も提案される。すなわち中世の道は幅や道筋の変化と共に、道路の幅とそばの建物の高さとの関係から特徴づけられ¹⁹⁾、ベルヌの町の歴史を表すものとして保全が指示される。したがってZPPAUPでは、日常的な空間を再発見し、これを保全しつつ活用することが意図されている。

建築的文化遺産は、建物の歴史的・文化的価値により以下のように５段階に区分され、保全手法が指示される(図－10)。

《文化遺産としての価値》

《保全手法》

重要な文化遺産

A. 歴史的建造物

1. 指定と登録による

B. 建築的価値の高い建物

B1. 貴族の館と庭

2. 保全と修復をする

B2. すぐれた建物

2. 保全と修復をする

B3. 中世とルネサンスの建物

5. 文書に残す

平凡な文化遺産

C. 特徴的な建物

3. 建築要素の再利用

なお建築的には価値がなくても、その同質性ゆえ町並みを作っている建物は、「４．同質性の点から保全する」と分類される。

このような区分をする際において、保全地区のような全国的基準はなく、現地調査による。また、４の「同質的な建物」のように都市空間の連続性の点から建物を評価することも、保全地区とは異

なるZPPAUPの特徴である。

５．設定される地区と景観規制

(１)ZPPAUPの区域

ここでは、ZPPAUPの区域について検討していく。ベルヌでは、登録景勝地と土地占有計画がZPPAUPの承認以前から設置されていたので、まずこれらの区域から考えていく。というのは、ZPPAUPは登録景勝地に置き換わり、一方ZPPAUPの景観保全のための規定はPOSの規定に編入されるからである。

ベルヌの旧市街地には歴史的建造物が多くあったため、市は1990年に旧市街地とその周辺を登録景勝地として設定した(図－11)。登録景勝地の区域として、歴史的建造物の多いかつて都市壁で囲まれていた地域と、これに結びついて形成された周囲の地域が設定されている。登録景勝地の制度では、ZPPAUPのような文化遺産保全のための具体的な基準は設定されず、農業公庫の行う開発や日常的なメンテナンス工事を除き、あらゆる工事についてパチモン・ド・フランスの建築家(ABF)が審査することにより保全がなされる²⁰⁾。

ZPPAUPは、この登録景勝地に置き換わることになる。前報で述べたように、登録景勝地の制度は廃止されたわけではなく、ZPPAUPの設置されている間は、ZPPAUPがこれに置き換わることになる²¹⁾。登録景勝地と比べZPPAUPの優れた点は、景観や文化遺産の保全についてABFの判断の根拠となる具体的な規定が設定されることである。

土地占有計画(POS)は1992年に承認された(図－12)。POSでは都市的地区をU、自然地区をNで表し、それぞれの地区の中をさらに区分して土地利用や容積率(COS)を定めることができる。POSの区域を見ると、旧市街地の全域とその北西部の歴史的な地域、および近年宅地化の進んだ南部の地区がUの都市化地区となっている。このPOSの規定に、ZPPAUPの景観を保全する規定が加えられる。

ZPPAUPの区域をみると、登録景勝地よりもかなり広い地域に設定されている(図－13)。また、POSの都市化地区だけではなく、北部のNで表される自然地区もかなり取り込んでいる。すなわち、都市空間の歴史の変容が考察された都市壁に囲まれていた地域とその周辺部だけではなく、北部の自然の残された一帯と、南部のビュイ丘の周辺も含めてZPPAUPの区域が設定されている。

保全地区では、建築を中心とした歴史的な地区の保存が目的とされたため、周囲の地区は検討されなかった。これに対しZPPAUPでは、歴史的な地区だけではなく、これを取り巻く自然の残された地域も対象とされる。このためベルヌでも、歴史的な旧市街地にふさしい周囲の緑地や水辺、あるいは景観的にすぐれたアプローチの一帯がZPPAUPの区域に設定されており、「建築的」あるいは「都市的」文化遺産と共に「景観的」文化遺産の保全が考えられている。

(２)設定される地区

ZPPAUPで設定される地区(ゾーン)については、制度では決められておらず、コミューヌがZPPAUPの区域と同様、区域の文化遺産を考慮し任意に設定することができる。ベルヌの場合、町が区域や地区についての方針を決め、これに基づき調査員が地区を提案した。この提案を市議会、およびその専門委員会である景観・文化遺産委員会が審議をして、最終的に地区を決めている。したがって、調査員は、単に調査を行うだけではなく、ZPPAUPの区域および地区の設定に大きな役割を果たしている。

表－３ ゾーンの性格

地区	地区の特徴		保全のための規制
ゾーン１ 市街化地区	一都市壁の内部の歴史的中心地で中世の都市構造がみられる。 一中心地の周囲の並木道で、中心地と視覚的に一体化なものにしている。		既存の都市構造を保存する。建物の様式を保全するとともに、歴史的中心地の周囲を一層、景観の上で利用していく。
ゾーン２ 景観地区	2 a 都市化地区	2 a 1 建設禁止	中心地の東側にあるビュイの丘中心地と直接、結びついている。ここでは建設禁止され、既存の緑地の保存が行われる。
		2 a 2 建設規制	ビュイの丘の南の一部で、宅地化が進んでいる。緑地の保存が行われる。しかし建設は緑地や塀を整備するなら許可される。
	2 b 自然地区		一建物を道路から一定距離はなす。 一道路から一定距離に塀を作る。 一道路中心から塀までの土地を建設の際、市に譲渡する。

地区は大きくゾーン１の市街化地区(zone agglomérée)とゾーン２の景観地区(zone paysagère)に区分される(図－13)。ゾーンは、歴史的に形成されてきた都市壁の内部とその周辺に設定されており、登録景勝地よりやや広い範囲が対象となっている。これは、ベルヌの町の歴史の変容を考慮した結果、設定されたものであり、自動的に都市壁の内部が設定される保全地区に比べるなら、より正確に歴史的地区が設定されている。

ゾーン２の景観地区は、歴史的地域であるゾーン１に調和した景観を保全するために設定された。このゾーン２は２aの都市化地区と２bの自然地区に区分される。２aの都市化地区は、旧市街地の南部にあるビュイの丘に設定されている。すなわち、この丘から歴史的地域であるゾーン１が見渡せるため、この一帯における旧市街地と共に見える視野(covisibilité)が都市化により損なわれないように２aは設定された。この「共に見える視野」は、フランスの景観の保全における基本的な考え方であり、1943年の歴史的建造物周辺500mの保全の時から用いられている。

一方ゾーン２bとして、北部の都市化のほとんど進んでいない一帯が設定され、歴史的地域にアプローチするのにふさわしい景観の保全が意図されている。このゾーンは、図－８で町の歴史の変容に基づいて文化遺産や景観が分析された際、保存すべきアプローチとして評価された一帯である。したがって、ゾーン２の景観地区はそれ自体としての景観というよりも、建築的、都市的な文化遺産を保全するゾーン１に調和した景観を保つために設定されている。

ゾーン１，２について地区の特徴が考慮され、保全の方針が指示される(表－３)。ゾーン１とゾーン２とでは地区の特徴が非常に異なるため、保全の指針も異なってくる。ゾーン１の市街化地区には、すぐれた歴史的建造物が多いだけではなく中世からの都市構造が見られるため、これを保全するための手法を導入することが検討される。一方、景観地区では、現在の景観を保全するための建設の規制が考えられることになる。すなわち２aについては、これ以上、建設が進むことにより旧市街地周辺としての景観が損なわれるのを防ぐため、建設の抑制が考えられる。特に直接、ゾーン１が見下ろせる２a1については、共に見える視野を保全するため建設は禁止され

表－４ 市街化地区の規制

	UA地区	UC地区
UA 3とUC 3	アクセスと道路網 一すべての建物、商店街は専用の入口を持つ。ない場合は設置する。 一両開き戸は、街路内での駐車のため継続される。	
UA 6とUC 6	道路に対する建設 一既存の建築線や広場に新築、再建する。塀については壁面後退も可 一規定のI 1, A 2において、既存の都市空間の再編ができる。	
UA 7とUA 7	一都市空間において、建築線が続いている場合には、区画の境界から離れて建物を建てることはできない。	
UA 9	街区の通気を良くするため、中庭の付属舎は建物についての工事を行う際には、除去されねばならない。	
UA 10とUC 10	高さの制限：４階までとする。軒までの高さは12.5 m以内とする。 上階への増築：最低限2.5 m後退して上階を設置する。	
UA 11とUC 11	ファサードの構成：既存の区画を守り、ファサードの幅とする。 開口部：伝統的な建物の様式に基づいて開口部を設置する。 窓の形態：窓はファサードの様式と調和させ、形状は縦長とする。 窓の材料：木を用い、枠や装飾を必ず着色する。 金物装飾と塀：金物装飾は着色する。塀の高さは1.8 m以上とする。 ファサードの材料：地元の切石を使う。修復の際は材料に適した技術くり型と装飾：伝統的な建物の様式、装飾を用いなければならない。 屋根：屋根勾配、庇、屋根窓の形態、煙突などは規定に定める。 ショー・ウィンドー：これはファサードと同質的にする。 看板：商業用の看板は、ショー・ウィンドーの範囲内に設置する。 排水：排水のための配管はファサードに現れてはならない。 ストリート・ファニチャー：これはABFの許可を必要とする。	

表－５ 景観地区の規制

2 都市化地区	2 a 1 建設禁止	土地利用 植物 塀、垣根	この地区では新たな建設はできない。ただし、既存の建物の拡張は検討対象となる。 あらゆる高木の伐採には、許可が必要とされる。また伐採後は代わりの木を植えなければならない。 これらは、場所の状況を考慮して設置しなければならない。既存のものは、そのまま用いられる。場合によっては、同じ性状のものに置き換えられる。
	2 a 2 建設規制	植物 塀、垣根	2 a 1の植物の場合に準じる。 2 a 2の塀、垣根の場合に準じる。
	2 b 自然地区	建設手法 景観の上での対応 塀、垣根	道路の中心から最低限 25 m離れた場所に建設する。また道路の中心から 17 mはなれた位置に塀を作ることが義務づけられる。この場合、道路の中心から 17 mまでの地域は、コミュニティに譲渡する。 一あらゆる高木の伐採には許可が必要とされる。また伐採後は代わりの木を植えなければならない。 一塀と建物の間の区域には木を植えること。また最低限 80 mについて 1 本の高木を植えること。 一コミュニティは、譲渡される道路と塀の間の一帯について、景観の上で対処しなければならない。 一道路沿いに作られる塀は、同じ様式で作られる。この塀は、高さ 1.8m のモルタル仕上げの石造りで、住居に対して、1 つの戸口を設けることができる。

る。一方、２bについては、現在の景観を保全するため一定の建設手法の導入が指示されている。

(3) ZPPAUPの景観規制とPOS

制度の上ではZPPAUPの景観を規制する規定は地役権として、土地占有計画 (POS)に編入されることになっている。ベルヌの場合においても、POSに編入される規定は「法規」の文書の中で原則として表

される。ZPPAUPの4つの地区とPOSの地区との対応をみると、ゾーン1ではPOSのUA地区、UC地区に対応している。しかしゾーン2はPOSのNA地区、ND地区、UC地区、UD地区と様々な地区に対応しておりPOSの改正が求められている。

景観保全の規定は、町の示した方針にしたがい調査員が作成した。この原案に対し、市議会と景観・文化遺産委員会で厳しすぎるから緩和するよう要求が出され、審議の結果、現行の規定ができた。この点、わが国同様、住民に文化遺産や景観の重要性を理解させ、規制を受け入れて貰えるようにすることが、ZPPAUPの作成において最も重要であった。

ZPPAUPの景観規制の手法は、ゾーン1とゾーン2とでは著しく異なる。当然のことながら、建築的、都市的な文化遺産の保全が対象となるゾーン1において、詳細な保全手法が導入され、文書も67頁の「規定集」と2種の「図面」が作成されている。この規定に基づいてパチモン・ド・フランスの建築家（ABF）が建築許可証を審査し、ゾーン1の保全を行う。それ以前の登録景勝地の制度では、このような保全を行う上での客観的な基準がなく、ABFの主観的な判断で保全を行っていた。したがって、ABFが景観や文化遺産の保全を行う上で客観的な基準の設定されていることが、ZPPAUPのすぐれた点である。

ゾーン1の規定の原則は「法規」において述べられ、そのままPOSの対応する地区の規定に編入される（表-4）。この際、ゾーン1はUA地区とUC地区に設定されているため、これらの地区のPOSの規定にZPPAUPにおける保全の原則が追加される。このPOSに追加される保全の原則も非常に詳細であり、特にUA11項、UC11項では、建物のファサードやプロポーション、建物の装飾に至るまで規制が述べられている。すなわちPOSがゾーン全体を対象として土地利用を中心とした規制を行うのに対し、ZPPAUPはゾーン内の個々の区画や建物を対象として形態や外観の保全を行うことができる。

一方、ゾーン2の景観地区は歴史的な建造物や都市構造がないため、景観を保全するための建設の原則が定められているだけである（表-5）。すなわち2a地区は都市化の進んだ旧市街地の南部にあるピュイの丘に設定され、植物、塀、垣根の保全が行われる。このうちゾーン1の旧市街地に直接面した地域は2a1地区、それ以外が2a2地区とされ、2a1地区では旧市街地と共に見える視野を考え、建設は禁止される。すなわち景観地区では、この地区だけのために規制が行われるのではなく、ここから旧市街地を見た場合の景観を保全するために規制が考えられる。この点、旧市街と呼ばれる都市壁内の個々の建物の保全を対象とする保全地区とは異なり、ZPPAUPでは旧市街地にふさわしい周囲の景観を含めて保全すべき区域が設定されるだけでなく、この周囲の地域から旧市街地を眺めた場合の視野も保全の対象となる。

2b地区では、一定の建設手法を導入することにより、歴史的な地域にふさわしいアプローチを保全しようとしている。すなわち、道路の中心から17m以上はなれた位置に塀を作り、25m以上はなれた位置に建物を建てることなどが定められている。原案では全面的に建設の提案が求められていたものの、市議会、景観・文化遺産委員会で建設を認めるよう要望が出され、このような形で規制が導入された。これがZPPAUPの計画で、市議会や景観・文化遺産委員会において最も議論された点であり、開発か景観の保全かという問題が日本ほど大きくはないものの、ベルヌのZPPAUPの作成にも起きている。

6. まとめ

(1)ベルヌ・レ・フォンテンヌのZPPAUPの運用では、調査員として任命された2名の都市計画コンサルタントを兼ねる建築家が、調査を行うと共に、ZPPAUPの区域、その中の地区（ゾーン）、さらには保全手法の提案など非常に重要な役割を果たしている。市のレベルでは、市議会の委員会の1つである市議会議員と地元の有識者から成る景観・文化遺産委員会が調査員から提出されたZPPAUPの原案について、地元の住民の要望を考慮して審議して計画を推進しており、保全地区における保全地区地方委員会の役割を果たしている。

(2)ベルヌのZPPAUPでは、11世紀から現在までの町の変容が分析される。ローマ法王の領地として発達した町は、周囲に都市壁を有し、内部には中世以来、道路網が形成されると共に、都市壁の外部にも街区が形成された。一方、19世紀には都市壁が取り壊され、その跡地に並木道が作られると共にカルパントラ運河も作られ、景観も大きく変わった。都市壁の内部だけが機械的に対象となる保全地区とは異なり、ZPPAUPでは都市壁の周囲の空間までが歴史的、景観的に分析され、これに基づき現在の文化遺産が評価され、ZPPAUPの区域やその内部に設定される地区あるいは保全手法が検討される。

(3)ベルヌの町の歴史的変容に基づいて現在の都市空間や文化遺産の現状が分析され、対応が指示される。この際、都市壁を中心として形成されてきた旧市街地だけではなく、その周囲の空間も旧市街地周辺として対象とされる。旧市街地は建築的、都市的な文化遺産の集積した歴史的な地域であり、すぐれた建物のもとより日常的な広場や道路なども評価され、保全と共に活用が検討される。一方、旧市街地周辺では緑地や水辺、町へのアプローチなどが検討され、歴史的な地区と調和した景観的文化遺産として保全が指示される。

(4)ZPPAUPの区域は、コミューヌが自由に設定できる。ベルヌの場合、旧市街地およびその周辺の文化遺産や景観を検討することにより、都市壁あるいは登録景勝地の区域を大きく超えた範囲をZPPAUPの区域として設定している。このように歴史的な地域それ自体はもとより、これにふさわしい周囲の景観を含む広い地域を保全しようとする手法は、従来の登録景勝地や保全地区の制度にはない、ZPPAUPにより初めて可能になったものである。

ZPPAUPの区域の中に、ゾーン1の市街化地区とゾーン2の景観地区とが設定されている。ゾーン1は都市壁と、これに結びついて形成されてきた隣接した地域を含んでおり、保全地区よりも正確に歴史的な地域を設定している。ゾーン2は旧市街地にふさわしい景観を保全するため設定されたもので、いわばゾーン1に付帯した性格を持ち、旧市街地の見下ろせる丘や都市化により損なわれていないアプローチの一角が対象になっている。

ゾーン1とゾーン2について、景観や文化遺産を保全するための規定が設定され、POSの中にその原則が編入される。このうち、歴史的な建造物や歴史的な都市構造のあるゾーン1では、道路の形態から建物の装飾に至るまで詳細に空間の規制が定められる。これに対し、ゾーン2の景観地区では歴史的な文化遺産がないため、既存の景観を保全するため、建設や植栽の規制が導入されただけである。

謝辞

本研究を行うにあたり、ヴォークリューズ県のパチモン・ド・フ

ランスの建築家であるラルマン氏、ベルヌ・レ・フオンテンヌの助役であるガベール氏に協力して頂きましたことに深甚の謝意を表します。また、調査員としてZPPAUPの調査をしたカダール氏、フルキエ氏にもインタビューに応じて頂きましたことに感謝いたします。

参考文献

- 1) ベルヌ・ラ・フオンテンヌのZPPAUPの文書
 - ①Definition(ZPPAUPの制度についての説明)
 - ②Note de Presentation (ベルヌの歴史と現在の都市空間についての説明)
 - ③Reglemen de ZPPAUP a introduire dans le POS(POSに編入されるZPPAUPの景観保全規定)
 - ④Diagnostique,Cahier des Prescriptions (ベルヌの都市空間の診断とこれに基づく景観保全についての規定とその解説)
- 2) 和田幸信: ZPPAUPの景観保全制度としての特徴と作成状況 フランスにおける建築的・都市的・景観的文化遺産保存区域(ZPPAUP)に関する研究 その1、日本建築学会計画系論文集、第512号、pp.221-228,1998年10月
- 3) 松政貞治: フランスの歴史的都市空間の保護と再生のための諸制度 フランス建造物建築家の統括的役割と面的な保全活用計画PSMV、都市計画 No.196, pp.52-57,1995
- 4) 松政貞治: 点・線から面への景観規制の移り変わり フランスの景観コントロール、造景、No.4, pp.167-174,1996
- 5) 稲本洋之助: フランスの都市計画法典、日本不動産研究所、昭和62年12月
- 6) Pierre Merlin,Françoise Choay:Dictionnaire de l'Urbanisme,Presse Universitaire de France,1988
- 7) Code de l'Urbanisme,Dalloz,1996 (フランス都市計画法典)
- 8) Protection du Patrimoine historique et esthetique de la France, Texte législatifs et réglementaires, Direction des Journaux officiels, No.1345 (文化遺産の保全についての法律や通達、政令を集めた行政文集)
- 9) Guide de la protection des espaces naturels et urbains,Le documentation française,1991
- 10) ZPPAUPについての法律と通達。
 - ① Loi No.83-8 du 7 janvier 1983, relative a la répartition des compétences entre les communes,les départements,les région et l'Etat. (地方分権を定めた法律で、第69項から第72項においてZPPAUPの設置を定めている)
 - ②Décret No.84-304 du avril 1984,relatif aux zones de protection du patrimoine architectural et urbain. (ZPPAUPの概要を述べたデクレ)
 - ③Décret No.84-305 du avril 1984,relatif au collége régional du patrimoine et des sites. (レジオン景観・文化遺産委員会を設置することを定めたデクレ)
 - ④Circulaire No.85-45 du 1er juillet 1985, relative aux zones de protection du patrimoine architectural et urbain.(ZPPAUPの運用の詳細を述べた通達)
 - ⑤Loi No.93-24 du janvier 1993 sur la protection et la mise en valeur des paysages et modifiant certaines dispositions législatives en matiere d'enquets publiques.(景観の保護と公開意見調査の修正についての法律で、第6項において ZPPAUをZPPAUPにすることを定めている)。
- 11) Service Technique de l'Urbanisme: ZPPAU du projet a la regle , Ministere de l'Equipement,1992 (1991年カンパールにおいて建設省が開いたZPPAUPについての会議の記録)。
- 12) Bouzely,J.C.: Zone de protection du patrimoine architectural et urbain,Revue administrative,Vol.231,pp.282-284,1986
- 13) Mesnard,A.H.:Ancien et nouveau lieux de concertation en matiere d'abords des monuments historiques de sites et de patrimoine, Revue juridique de l'environnement,Vol.1,pp.17-31,1989

- 14) Marinou,A.: La ZPPAU Un instrument de gestion concertée du patrimoine culturel et du patrimoine naturel ?,Colloque patrimoine culturel patrimoine naturel,pp.156-160,1994.12
- 15) ZPPAUP en cours,1996,Le Ministère de la Culture.(ZPPAUPの設置数と作成数についての文化省の資料)。
- 16) 芦原義信: 町並みの美学(同時代ライブラリー19)、岩波書店、1990

註

- 1) 正式名称は、Zone de Protection du Patrimoine Architectural,Urbain et Paysager.
- 2) 参考文献2
- 3) site inscrit.登録景勝地はZPPAUPが設置された場合、ZPPAUPに置き換えられる(参考文献2、pp.223-224)。
- 4) 1984年のデクレ(参考文献10の②)の第4項による。レジオンは1952年に設置された行政単位で、フランス全土に22あり、国からレジオン知事が任命されている(参考文献2の註6)。
- 5) 前報で指摘したように、作成中とされるZPPAUPの中には、実際には作成が凍結された区域も含まれる(参考文献2、pp.226-227)。ローヌ・アルプ・コート・ダジュール地域圏で作成中とされるZPPAUPのうちブリニョルとオランジュの2区域は、事実上作成は中止されている。
- 6) 参考文献2、p.226.
- 7) ZPPAUPは、1983年の法律では ZPPAUであった。その後、1993年の法律によりpaysagerが加えられZPPAUPとなった。したがってベルヌの場合、作成中に名称の変更が行われた。
- 8) 参考文献2、p.224.および参考文献12、p.29.
- 9) 参考文献10の②の第3項、参考文献10の④の2.3、2.4。なお、土地占有計画(POS)あるいは保全地区においても、この3種の文書が作成されることになっている。
- 10) 図面を除くA～Dの文書は、それぞれ参考文献1の①～④と対応している。
- 11) Architecte des Bâtiments de France. バチモン・ド・フランスの建築家は、文化省が各県に設置している県建築局の代表で、県における歴史的建造物などの文化遺産の保全を監督する(参考文献2の註5)。
- 12) CRPSの予備審査については、参考文献1の④、2.1.2項において、これは非公式な手続きであると述べられている。なお、ZPPAUPの作成手続きについては、同じ通達の3.1項で述べられている。
- 13) フランスでは県知事(préfet)は国から任命される。これに対し、県民が選出する県議会議員により県議会(conseil général)が組織され、この県議会に各種の行政を担当する部局がある。
- 14) 参考文献10の②、2.1.2項。
- 15) これら全文書が、参考文献1の①～④である。
- 16) 11～12世紀のベルヌの町の図面では、13世紀の図面(図-2)で表される旧シャトーとその周辺の住居群が表されている。
- 17) ZPPAUPにおける考古学的重要性は、よく指摘される。参考文献1、p.222; 参考文献13、p.20.
- 18) フランスでは宅地化にあたる単語はなく、すべて都市化(urbanisé)で表される。ここでは、ピュイの丘に宅地が造られたことを踏まえ宅地化と表現した。
- 19) 芦原義信は、道路の幅と両側の建物の高さの点から外部空間を分類している(参考文献16、pp.69-74)。ベルヌにおいても中世の道について、同様の視点から特徴が分析されている。
- 20) 参考文献9、pp.88-89.
- 21) 参考文献2、pp.223-224; 参考文献13、p.284.

(1998年9月24日原稿受理、1999年8月2日採用決定)